

私の名盤レコード 2. スティリー・ダン (Steely Dan) 編

大学3年生の頃、軽音クラブの先輩が数枚のジャズのレコードを貸してくれました。その頃は、ロックからジャズフュージョン系に興味に移った頃で、ラリー・カールトン、リー・リトナー、アル・ディメオラや日本では渡辺香津美、増尾好秋など有名どころのレコードやギタースコアを食費を切り詰めて買いまくっておりました。かなり練習をしましたが、簡単に弾けるようなシロモノではありません。音楽性や技術がロックとは段違いのレベルに「一生弾けないかも」と思いながらも、学業を疎かに指が痛くなるまでギターを弾いていた頃です。

先輩のレコードで、記憶にあるのが3枚で、アート・ペッパー (Art Pepper Meets the Rhythm Section)、ウェス・モンゴメリー (Full House)、そしてスティリー・ダン (Aja) です。この3枚は、今でも好きでよく聴いております。

今回はこのうち、スティリー・ダンの最高傑作とっております、1977年のアルバム「Aja (エイジャ、出典 ABC Records)」について語ってみます。まずは、スティリー・ダンについてですが、1971年の結成時期はバンドでありました。ロックのなかにジャズの要素を取り入れた楽曲ですが、初期はロック色が強い感じです。

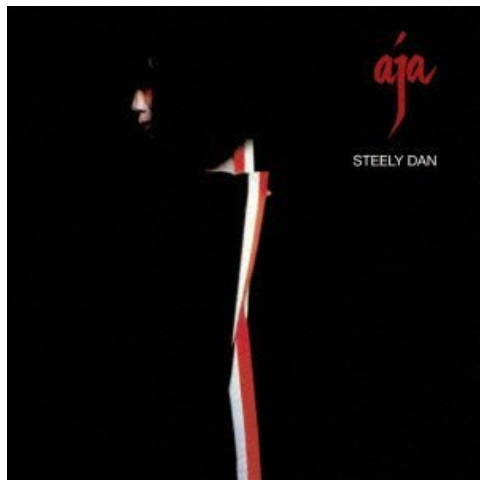
その後、中心メンバーであった「ドナルド・フェイゲン (ボーカル、キーボード)」「ウォルター・ベッカー (ギター、ベース)」の二人組のユニットとなり、アルバム作成時にはセッションミュージシャンや西海岸などの有名ミュージシャンを集め、スティリー・ダンとしてアルバムを発表していきます。アルバムを出す都度、よりジャズ色が強まり洗練されていきます。有名どころでは、ジョーサンブル、ラリー・カールトン、トム・スコット、スティーブ・ガット、ウェイン・ショーター、リー・リトナー、スティーブ・カーンなどジャズシーンでは錚々たる顔ぶれです。初期のアルバムには、ゴリゴリのロックギタリスト、リック・デリンジャーが参加しております。

アルバム「Aja」を初めて聞いた時ですが、それまでスティリー・ダンのことはまったく知らず、レコードジャケットは黒を基調にアートとしてもとても魅力的で、スリムな東洋人女性が素敵だなと思いました。この方は、日本人で海外でも著名なモデル「山口小夜子」さんです。

1曲目「Black Cow」から「おお～」という感じで、何とも不思議な感覚です。乗りの良い4ビートのリズムでシンセとベースのユニゾンから始まり、メロディーラインやコーラスはまさにジャズですが、頭にスッキリと入り耳に残ります。難解なジャズのコード進行と思いますが、難しさを感じません。高度な音楽ですが、まるでポップスを聴いているような感覚で聴けます。

2曲目はアルバムタイトルの「Aja (エイジャ)」です。この曲は、自分ではおそらくスティリー・ダンの最高傑作だと思ってます。エレクトリックピアノから始まり、ドナルド・フェイゲンのボーカルへと、そしてアンサンブルが重なり、サビのコーラス、サクソソロ、

すべてが一体感ある何とも言い難いグルーブ感につつまれます。高度で難解な曲でありながら、それを感じさせず聴き手に「心地良い感覚」をあたえる、不思議な乗りの曲です。ジャズとポップスの融合なんでしょうか。サビのところは、つい口ずさんでしまいます。



3曲目は「Deacon Blues」で、ブルースの入った曲名ですが、12小節の定番ブルースではありません。ジャズブルースという感じでもなく、ポップ性の強いジャズソングかなと思います。

スティリー・ダンの中心はボーカルとコーラスであり、とても洗練された高度なミュージシャンの演奏、今までにないメロディーと難解な曲の構成とコード進行がとてもうまく組み合わせられた、ジャズポップスと思っています。自分は英語の歌詞や意味には無関心で、いつもただ曲を聴くのですが、ついサビのメロディーを口ずさんでしまう乗りの良い音楽が、スティリー・ダンの魅力だと思います。

今回はA面の3曲を紹介しましたが、この「Aja」というアルバムは、全曲を通して一貫性のある曲作りとなっており、完成度の高い最高傑作であると思っています。音楽は高度かつ難解ではありますが、メロディーの流れはとても自然で美しさがあります。

1回聴けば何度も聴きたくなる、数年聴かなくてもまた聴きたくなるそんなアルバムを紹介しました。

スティリー・ダンのアルバムは、おそらくスタジオ版9作品、ライブ盤1作品で活動期間から見ると多くはありません。興味があれば、ぜひ若い世代の方にも聴いていただきたいと思います。